

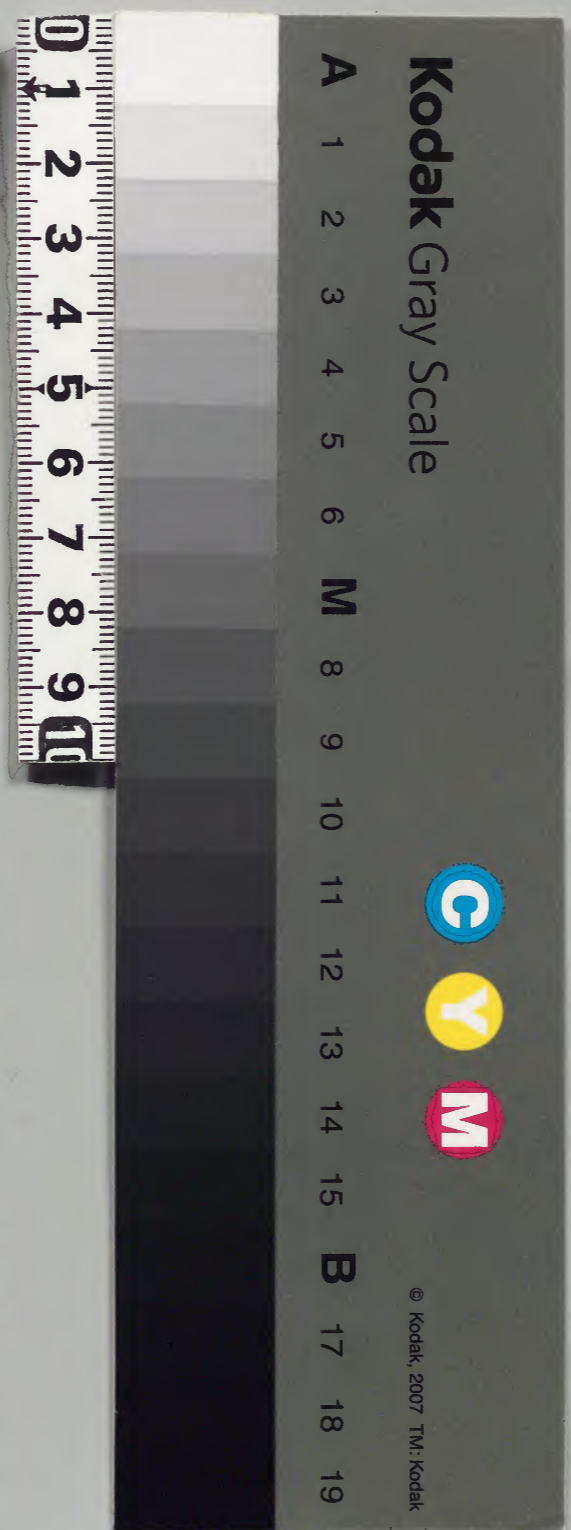
日本書紀傳

十五卷  
九止

和 一〇五二二號

四十三

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (52)	
函號	特	85 1



文庫印

南政官

南政官

○神名式同国安積郡宇奈巳呂和氣神社名神飯豊  
 和氣神社隱津島神社三座有り松藩搜古云物小延  
 喜式安積郡三社の内宇奈巳呂和氣神社を八幡村の  
 八幡宮と言傳つ祭神瀬織津姫命初始宮の西高  
 嶮山在相武天皇の延暦年中蝦夷征伐の時神助  
 有て譽田別尊をも配祭今の宮地に勧請すと云り  
 石の瀬織津姫命大被詞の多岐都速川より混水つ  
 有り者りて宇佐の湍津姫命を訛りるあり可く也又宇  
 奈巳呂和氣ハ海凝別あり上十百丁引る宗像社  
 記小第一神ハ海淡を聚めて島を築き居を遠海の奥

○日本書紀傳 十一

○三百九十二

附 二六八

△も云ひ又阿多  
羅の羅明神  
ありとも

小示し給ふと有れば由無きハ非ズ又飯豊和氣神  
社ハ白河郡ハ飯豊比賣神社有を撰津国比賣許曾  
社記ハ雀宮神社祭神ニ座別雷命飯豊命別照姫勸請  
奥州白河郡仙谷郷矣と有ハも考合す可き事あり  
飯豊和氣神社を今飯盛山妙見と申すと云ハ下照姫  
命ノ別稱を飯豊命と申すハ右ノ二社必同神ナ  
リ可シ和名飯豊山と云ふ高山あり有ハ如何ハ古  
カ當りて飯豊山と云ふ高山あり有ハ如何ハ古  
ク世の跡ラ右ノ隠津島神社ハ松藩搜古ハ内木幡  
村辨財天社是ありと云傳ハ阿多羅ノ羅明神を飯  
豊和氣神社木幡山の辨財天を隠津島神社ハ幡の宇  
奈巳呂和氣神社ニ昂足の如く三方ハ在と云ハ有

△此阿多羅  
和名秋郡安達  
安多和と有る事  
三百九十八ノ注  
如く古ハ安田多  
と云ハ此ノ註  
て思ハ上重ノ  
云ハ安房國手  
郡達長郷ノ  
ノ義ハ此ノ上達  
彼磯路ハ幡を風  
土記ノ所祭宗像  
神社也と有ハ思  
合ナ可

り隠津島を一の訓ハ加久礼都島と有ハ甚謂ハ無  
右ノ帳ハ近江ノ奥津島神社ノ例も有ハ又上野国  
神名帳ハ息津と億津と也○神名式ハ出羽国田  
作何ハ於伎都あり者也  
川郡伊氏波神社今羽黒山と云ハ是あり社傳ハ所祭  
玉依姫命同郡由良浦八女窟ハ御在ハ坐ハを羽黒  
ハ祀祭ハ故ハ其窟ハ伊氏波神社ノ穴ハ相通ハ  
と云ハ其由良ノ地名と云ハ玉依姫命と申す神名  
と云ハ愈以て宗像大神ハ御在ハ坐ハ事決ハ有  
けハ然ハ飽海郡大物忌神社大倉稲魂命ハ坐  
て此第一ノ書ハ奉助天孫而為天孫所祭也と有ハ如  
く天照太神ノ御命以て此三女神を以て持斎ハ

奉給ふ大神の御在し坐し同郡月山神社大神ハ素々  
り此三女神の御父大神の渡りせ給へるも由有る事  
傳十四四下の証るが如し又其村鹿野国見山と云有り  
神の国形を見行ハし所ある故に国見の名残なり  
斯以ハ甚し久しき神代よりの鎮坐ある可き事申す  
も更なる御事あり但此社今ハ出羽国ハて此無き佛  
せる事ありしすも皆ハてハ奸僧の妄説  
深し思ハる備其由良浦ハ八女女の故事を傳たるも  
政有り神宮雜例集ハ見えたる日神の御言ハ三女神  
宇字佐島降居道中奉助天孫而爲天孫所祭止詔之

須勢理姫乃齋奉礼神今丹波国興佐乃比沼乃真魚井  
坐豆道主王子八字止女乃齋奉御饌都神止由居乃神  
と有る由有り又同国小由良湊と云地有り曾根好忠  
ハ歌ハ詠る是あり上二百十ハ云る神名式の隱岐国  
知夫郡由良比女神大神を頭注ハも一宮記ハも大  
己貴命嫡后須勢理姫命と有る周吉郡賀茂那備神社  
水祖神社有ハ常国田川郡小由良浦加茂浦の地名有  
ハ相叶ハ又紀伊国日高郡ハも由良と加茂の地名並  
ハ又神名式ハ淡路国津名郡賀茂神社由良湊神社有  
ハ和名板御名ハ賀茂加と見え延喜式ハ由理駅と云

る地是あり又讚岐国寒川郡神前神社を今神前八幡  
と云ハ相摸国高座郡 寒川神社名神を寒川八幡  
と申すハ同トク神前ハ神后ハ大國主神の后神ハ  
渡らせ給ふ謂之聞えたるハ讚岐国式内神社考と云  
物ハ神前村遊良山の鎮坐と云も同トク由良の例ハ  
玉依姬命ハ渡らせ給ふ例あるを彼此思合せて曉  
可き者ありト又此羽里神社ハ二顆の宝珠有て  
神体と共ハ内殿ハ藏め置く由あるハ決めて神代の  
舊物あり可ク 寺僧の傳ハ開山能除太子湯殿山権現  
太子と云ハ我ハ皇胤ハ見元ざり人ハ思末無事  
あり神代より傳ゆる事を開山ある某ハ感得せり如

く云成ハたるハ有ハ此玉ハ執て高しき事有り  
其工人梅木利彦云く庄内鶴岡ハ宇治勘助と云者有  
けり中項其羽里麓あり玉川村ハ一名国見村何某ハ子  
を養ひて家を継せたりハ其家ハ火玉水玉と云子ハ  
を傳へたりハ養子ハ遣ハせりハ娘ハ授け水玉ハ右ハ  
能ハ快精と云者ハ一夜宿りハ家の持佛堂ハ在り云  
我ハ羽里の神玉あるハ今此家の持佛堂ハ在り云  
共ハ佛堂を拜見するハ美事三度ハ及たりハ其本  
持佛堂を拜見するハ美事三度ハ及たりハ其本  
の羽里ハ傳たりハ火玉ハ白く水玉ハ薄藪色あり  
天文の頃失給ひて更ハ行方を知ざりハ玉ハ今見  
たる事ハ驚く高橋ハ直ハ勤助ハ右ハ水玉ハ今見  
つる程ハ鈴木某ハ開某と云者ハ予ハ洗すハ其玉ハ取  
見たるハ忽ハ里色ハ雲者ハ給ハハ洗すハ其玉ハ取  
玉ハ羽里の本殿ハ奉る由あり然ハ云ハ今其僧  
徒を以て持斎ハ事ハ神ハ如社説ハ右の玉依姬命ハ  
何計ハ苦ト思わすハ如社説ハ右の玉依姬命ハ

の二坐之傳へたれども羽黒三所推現と申せれば今  
二神ハ御父素戔鳴尊御夫大己貴命ハ渡りて給ふ可  
し其本殿の下小由良の八少女窟に通ふ穴有りと云る  
も山城の祇園尾張の津島あり素戔鳴尊を祀りる社  
ハ限て有る事已の上三百五十九下カ如し又此部内  
ハ其御子神等の社多うり夫神の御在り坐ぬ理無  
れば賀茂御祖神社の如く玉依姫命を本宮として大  
己貴命ハ容坐り御在り坐ある可し其ハ田川郡荒倉  
神社と云有り元羽黒里と云地あるハ祭神を事代主  
命と云ひ神各式の由豆佐賣神社ハ溝咋姫命ハ坐せ

ハ其右神ハ渡りて給へるを思ふハ素戔鳴尊大  
己貴命二神の御在り坐さると云ふ謂ハ無き事を思  
ふ可し又同郡と越後の磐船郡の界ハ根津開と云有  
り其海中ハ根津ヲ辨敷天と一神と一子御社御在り  
坐を田村長柄鈴木秀直あり行て正しけりハ古老の  
傳ハ其島を龍津島と云りて云るハ湍津姫命の御名  
ハ通へりて云るも等閑ありぬ由緒と聞えたりハ右  
説ハ去リ嘉永元年九月許ハヤ有けむ予其国より  
二大瀧光賢と共ハ越後の桂巻重許正あり程あり  
事就て人共伊勢詣せむと訪来れる時ハ説あり故此  
良ハ至りて給ひ彼ハ初先右の龍津島ハ坐て其より  
○日本書紀傳十五  
○三百九十六

かハ移りし御○神名式ハ能登国鳳至郡奥津比咩神  
在し坐りし御○社邊津比咩神社御在し坐も若くハ宗像大神ハ坐  
さるハ地神本紀ハ由心姫命亦名奥津島姫命湍津姫  
命亦名邊津島姫命ハ有ハ似着ハ一ツレハあり但若  
其ありむハ正しく島字を加へて申す可きハ然  
ぬハ猶別神ハ御在し坐也彼国の名勝志ハ云物ハ  
神明ハ奥津姫大明神の  
社有ハ又七島の南の磯邊ハ奥津姫大明神の  
見又同式羽咋郡氣多神社ハ一宮記ハ大己貴命  
ハ有リ名勝志ハ本殿ハ大己貴命奥社ハ素戔嗚尊稻  
田姫命頂社ハ大己貴命の石像あり神代より鎮坐り

又湍津珠有り奇蹟有リ靈顯あり大祭ハ二月初午ハ  
能登生国玉比古神社ハ神幸有テ二夜を經て歸りセ  
給ふ略十一月中の己日ハ鷄祭あり鷄浦村より鷄を  
捕り午日清祓して己刻神前ハ放つ其鷄自本社ハ階  
を上り幌の前ハ羽叩いて跪く所を捕へて海ハ放  
つ此鷄越後国中山神社能生権現の磯ハ依たり時彼  
社の祭礼あり傳云北島の女神此鷄浦の磯ハ依給ひ  
一宮神ハ夫婦ハ成給ひし御中好ハ一ツレハ非りけ  
れハ越後の能生へ飛給ひて或社地を借て任給ふハ  
因りし云る此北島の女神ハ宗像大神ハ坐を

故有て能生浦へ放るせ御在し坐を御中の不平ある  
由の訛傳りり者あり能生浦ハ越後国頸城郡ある  
を其海邊不能生の辨財天とて甚神とて其神地有る  
此を云ある可し中山神社と云ハ古名ある可し式ハ  
蒲原郡中山神社と云有ハ其ハ  
甚く懸離れたる所あり有けハ其ハ非ず今と辨  
財天と申す所ても大己貴命の嫡后須世理毘賣命ハ  
御在し坐す事疑○越後国三島郡鷺川神社式ハ見内  
子可ハ非りあり  
彼国の式内神社案内と云物ハ米山の東黒姫山ハ在  
り黒姫山麓あり山上迄二里其より流出る川を鷺川  
と云ふ御鎮座の巖窟ハ容易く登り難し山の中腹ハ  
舟入の窟有り山の尾崎を舟道と云ふ明神臨幸の時

鷺島御舟を引上りし道ありと云ふ又唯柱石有り  
云ふハ右ハ云る能登国氣多神社の右神の事ハ引合  
て聞ゆハあり頸城郡あり黒姫山と云有ハ共ハ同神  
の鎮座あり可し又柏崎の東南枇杷島八幡也と云  
り此鷺川神社の別社を右の如く八幡宮と申せりハ  
ても曾形の三女神あり事知るとあり又式ハ同郡多  
岐神社有ハ磐松郡ハ多伎神社有ハ共ハ湍津姫命の  
謂ハハ非りハ和名抄ハ三島郡多岐郷有り三島郡ハ  
云ハ湍津  
ハ伊豆の三島より分れたる可し神名式ハ三島神  
社有ハ傳ハ十一卷ハ云る如く素ガリ事代主命ハ御在  
し坐あり又御島磯部神社姓ハ録ハ依ハ天日方奇日  
方命ハ一ハ事代主命御子ありあり考合す可き者ハ



○神名式丹波国桑田郡松尾神社今保津村  
在り浮田大明神と申す相傳へ此神ハ松尾大明神  
ありと云り其浮田社記ハ遠古世丹波国湖也大山咋  
神決其水涸而後為家郷及田地於是尊崇此神徳祠之  
以称桑田浮田明神以鋤為神体と見え神代系圖傳ハ  
大山咋神決丹波国湖水涸而成土兵以鋤為神体者山  
城国松尾大神也と云ハ山城名勝志ハ以鋤為神体社  
坐丹波国保津邑浮田明神社と記ハ羅山文集ハ又  
有浮田神祠世傳遠古之世丹波国皆湖也大山咋神穿  
浮田決其湖於是丹波水枯成土乃建祠而祭之以鋤為

神之主此神即是松尾大神也と有ハ如ク山城国葛野  
郡松尾神社二座並名神大月の本社ハ有けハ此  
松尾神社ハ何座とハ無ハとも此も御祖曾形中都大  
神と共ハ鎮坐ハキ御事ハ有けハ此ハ次ハ了ハ山  
云ハを考合サ可ハ古丹波国の湖水ありハと云説ハ  
己ハ傳十二卷九十七下大山咋神の傳ハ云りきハ  
又同郡鋤山神社も同神ハ坐り社記ハ原夫云古天  
地開闢而神功既畢靈運方遷其自後亦出雲洲大己貴  
神巡行始到此洲為此洲也鴻水懷山濁浪排空故神鎮  
八神南方到黑柄嶽視水脉地勢逆流西下其今水戸峠  
是東方見有山狹可通水而鑿山劈磬噴流決之神始鋤

△神主唐藏其説  
 とて書小中素  
 鳴尊左大己貴  
 右稲田稚命と云れ  
 が三程共

取成此洲里給依之崇奉号歟山大神と見えたる此傳  
 の依る時ハ出雲より大己貴大神の八神を鎮て其国  
 き開つせ給へるあり其所祭松尾と同一子由ありハ  
 大己貴命胸形中都大神大山咋神の三神也御在す  
 ぶ又同郡出雲神社名神一宮記ハ三穗津姬命と有  
 出雲神と有るハ大己貴神其御在  
 坐あり可くや又同郡多吉神社ハ宗像神坐ハ同  
 郡大井神社を社傳ハ酒美豆男命酒美豆女命三神山  
 城国松尾神社より出立して大井川を鯉背の乗て沂  
 り来坐て鎮坐す故ハ大井神社と云と云り此神名を

然称申せし事ハ松尾大神を酒神と申傳へたるハ也  
 合此ハ大山咋命と曾形中都大神との亦名ありける  
 者あり大井神社ハ龜山より一里北大井村並河村の  
 産土神あり右の田緒に依て此氏子の者鯉魚  
 を食ハズ食ふ時ハ忽ハ現罰を受て云り争ふトキ  
 事あり又飯山神社ハ龜山より半里許南矢田村と云  
 立せ御在し坐り儲又當郡式内ハ小川月神社名  
 神大己貴神ハ三女神也御在し坐り  
 伊達神社ハ五十猛命ハ坐り三縣神社ハ大己貴神の  
 御末の攝御方命と云有ハ何れも神世の跡處と云  
 出聞え同式ハ丹後国典謝郡須代神社ハ度會延經  
 たる  
 の神名帳考證ハ大同本記云素戔鳴尊所坐三女神奉  
 助天孫而為天孫所祭正詔之神丹波国典佐乃此沼真  
 名并坐須勢理姬乃斎奉御饌都神止由居乃神牙と見

元乃此此右の三女神を合せて此にて須勢理  
毘賣命を祀奉れざるを約めて須代神社と申せざる  
可し其所祭給ひし式丹波郡比沼麻奈為神社  
にて須勢理比賣命の祭給へる幽みこの御事にて  
顯小丹波道主命の御女等の祭祀を主り御在し坐  
し依て右の例集わ道主王子八子止女乃禰奉  
ありけり又神社啓蒙小竹野郡伊都伎大明神  
云を載たる式外にて有れども其須勢理比賣命  
の其大神を斎き御在し坐し故事あり有る可し  
又丹波国氷上郡み伊都伎神社神名式み見ゆ其故  
由今知る可りさゆども此同神にて御在し坐しつ

可き御事 ○又式小但馬国城崎郡久々比神社を出石  
ありし人井上觀が著せし其国の続風土記小在三江郷下宮  
村称胸肩大明神と云る後人の思寄りし神名を  
り改思ふみ上三百四下十二み云るが如く魚仁天皇二十三  
年御紀み秋九月丙寅朔詔群卿曰嘗津別王是生年既  
三十髯鬚八掬猶泣如児常不言矣何由因有司而議之  
冬十月乙丑朔壬申天皇立於大殿前嘗津別皇子侍之  
時有鳴鶴度大虛皇子仰觀鶴曰是何物耶天皇則知皇  
子見鶴得言而喜之詔左右曰誰能捕是鳥獻之中時湯  
河板孝遠望鶴飛之方追尋詣出雲而捕獲或曰得千但

馬国に有る其事を古事記に遂に高志国而於和  
那美之水門張網取其鳥而持上献故号其水門謂和那  
美之水門也之有て高志国の趣ありとも熟思ふ高  
志国より多邊麻国の和那美之水門の歸到けめと  
も言ふあるに依て分明しうさるあり神名式に但  
馬国養父郡和奈美神社御在し坐て今網場村之云ふ  
立せ給へるに論ずり、慥ある證と云者あり、此朝  
屋岡川と落合ふ川合あり所あり城崎川と云ふ大河  
と成る所あり右の網場村を字あり然書けとも唱  
今訛りて那年深と云あり其川向ふ八鹿村と云有り  
其地西村と暉と云あり其相知り人ありけり  
水行訪しけり其地理を究めたり説有けり右の和奈  
美と叢生しけり其御紀の傳に云べし

美神社即和那美之水門あり時、此久々此神社も其  
時の事小因て被定たる所あり事云も更ふり其皇子  
の言語為させ給はざる事を古事記に、出雲大神の  
御心ある由所見たるに就て考ふるに、出雲風土記仁多  
郡三津御條に大神大穴持命之御子阿遲須根高日子  
命御須髮八握于生晝夜哭坐之辞不通尔時祖命御子  
乘船而幸巡八十島宇良加志給鞞猶不止哭給大神夢  
願給告御子之哭由夢尔願坐則夜夢見坐之御子之辞  
通則寤問給尔時御津申尔時何處然言問給即御祖前  
立去於坐而石川度坂上至留申是處也尔時御津水

沼於而御身沐浴坐下有祖命々御祖々申す  
ハ味耜高彥根命の御母田心姬命坐か御子の言問  
さぬ々甚く御心を盡させ給へ々神坐故々此々  
も皇子の言問て給々む為々其鵲の事々就々胸肩  
大神ハ祀奉れりけむ右々引る御紀々天皇則知皇子  
見鵲得言而喜之々有々此鳥々居置々皇子ハ  
言問給々思々あ々此鳥を捕々就々其  
御祈々有けむ事々更々御奉あり右江郷  
也見え々御名あり若國々其鳥を追巡々  
りし但馬國々至りて見得々由々あり々也有々  
む々和那美神社の御在坐網場村々氣多  
郡を經て五里許川下坐て豊國と云有々其々城

△文德天皇實錄  
山齊衛三年八月  
辛未朔一亥伯耆  
國宗形神從五位  
上有是々  
○傳手卷百十七  
丁々

埴川を渡りて半里許東方坐丹後國熊野郡久美濱  
小至る道傍坐在り予も稲葉英好許至る毎々詣  
たり事坐○神名式坐伯耆國會見郡胸肩神社今胸形村  
小坐坐云り其傳記詳々若くハ同郡大神山神社  
坐る其由坐縁坐神社ある々也○同式坐出雲國出  
雲郡杵築大社坐大神大右神社坐有々決々嫡  
右須勢理毘賣命坐御在坐事今云坐限坐非坐ず  
此を凡土記坐御向社坐見内御嫡妻社坐申す義坐を  
り古事記坐須佐之男大神の遙望呼謂坐大穴牟遲神曰  
略意礼為坐大國主神亦為坐宇都志國玉神而其裁之女須  
世理毘賣為坐嫡妻而於坐宇迦能山之山本於坐底津石根宮

狂布乃斯理於高天原氷椽多迦斯理而居是奴也と宣  
給ひて授給へる女神の御在し坐せハ大国主大神と  
其御向位ハ御在し坐す御妻ハ渡りて給ひて尊事  
世ハ類無くある御在し坐けり  
其次ハ故其ハ上比  
費者如先期美ハ阿  
多波志都故其ハ上比賣者垂章未畏其痛事須世理昆  
賣而其所生子者刺殺木侯而返故名其子云木侯神亦  
名謂御井神也又有如御妃ハ上比賣ハ其ハ前  
期ハ世御在し坐し御妃ハ上比賣ハ其ハ前  
へるを以て嫡后の甚ハ同記ハ又其神之嫡后須勢理  
畏く尊く坐事を知ハ同記ハ又其神之嫡后須勢理  
昆賣命甚ハ嫉妬故其日子遠神和備且自出雲將上坐  
倭国而東裝立時片御手者繫御馬之鞍片御足踏入其  
御鏡而歌曰略中尔其后取大御酒杯立寄指拳而歌曰略中

如此歌而為<sup>即</sup>宇伎由比而宇那賀氣理且至今鎮坐也此  
謂之神語也と有ハ如く其蓋結の御時よりして頸懸  
ハ為給ひて杵築大社ハ相共ハ鎮り御在し坐る傳ハ  
ハ故大国主大神の皇御孫尊ハ天下国土を避奉りて  
給ふとして八十隈子の隱給へハ此大后神ハ身形を  
三宮ハ納置て隱給へる事上三百ハ筑前風土記を  
引て委しく註せり如く諸神名帳風土記共ハ大后  
神社ハ一社あるハ當今ハ御向社 筑紫社 天前社の  
三社御在し坐るを社説ハ御向社ハ嫡后須勢理昆賣  
命筑紫社ハ彼三女神天前社ハ三穗津姬命ありと云

水ども此二社の神名帳に載さず又凡土記並不在神  
祇宮之有る中にも見えざれば後に出來りあるむ  
と先小の思ひしうども猶深く考る小御向社も元ハ  
三女神の御在し坐せども御身を合せて大神の大神  
須勢理毘賣命と申奉る方を以て祀奉り筑紫社ハ其  
本宮胸肩の御在し坐す御靈を祀奉り天前社ハ此大  
神高天原より天降坐（右に成給へる）御靈を祀奉りしめて此  
三社の式小大神大神社と有る一社を称別て上古  
より祭來りしを同神と異神と知る水ず成來しあり  
然る社説も出來初りけむし一神を別て祭りし例ハ  
此大社ハ大國主神ハ

御在し坐す別小大神社ハ大穴持神社式ハ見え又大和國城上  
郡大神大國魂神社ハ八十矛神の御在し坐す同ト山邊郡  
大和國魂神社ハ八十矛神の御在し坐す同ト山邊郡  
者あり天前社を三穗津姫命と云れど其ハ和魂大  
物主神の后小因云凡土記ハ神門郡朝山郷郡家東南  
五里五十六歩神魂命御子眞玉著玉之邑日女命坐之  
尔時所造天下大神大穴持命娶給而每朝通坐故云朝  
山マ有ハ神魂命の御子トハ有れども眞玉著玉之邑  
日女命と玉依姫命と相似たり邑日女命と由良比女  
命と相通ひて聞ゆり神名式ハ朝山神社有る是カ  
今朝山八幡宮と申す事大所申す事ト云ハ  
り又同記ハ同郡八野郷郡家正北三里二百一十歩須  
佐能哀命御子八野若日女命坐之尔時所造天下大神

此八野若日女命  
即下章第一書  
所見たる推日女傳  
中渡り給へる傳  
三卷中註せり考  
合す可き事共  
あり  
六百六十六

大穴持命將娶給爲而合造屋給故云八野之有も別神  
とハ聞えず大后須勢理毘賣命の御在し坐りめども  
御名の別あるが故に分明しうらばれども古事記の  
大國主神亦娶神屋楯比賣命生子事代主命と有る神  
屋楯ハ神屋建の義あり右の合造屋ハ打合る者あ  
り其ハ上三百七十九下七十九ハ云るを考て知べし然れバ八野ハ  
屋主の義若日女ハ和加須世理比賣命の須勢理を略  
ける御名ある者あり此社神名式ハ八野神社と出た  
り故此眞玉著玉之邑日女命と八野若日女命を同神  
と定云ふ所以猶有り古事記ハ右の如く楯后を畏  
朝山ハ郡家の東南五里五十六歩と有り八野ハ郡家

の正北三里二百一十歩と有り滑狭郷とハ余りも程  
と隔らざりし心を考て決めて同神あり事  
あり同記ハ同郡滑狭郷郡家南西八里須佐能袁命  
御子和加須世理比賣命坐之尔時所造天下大神命娶  
而通坐時彼社之前有磐石其上甚滑也即詔滑磐石哉  
故云南佐神龜三年改字滑狭と有り此ハ大神の大后須勢理毘  
賣命の初て出雲ハ御在し坐着たる初の所ハ有ハ  
うりける其より八野ハ朝山ハ其邊ハ廣く住ハ  
せりけし其御娶坐て生坐る二御子ハ中ハ味耜高  
彥根命ハ高岸郷ハ坐し次ハ下照姫命ハ多吉郷ハ坐  
て大凡神門郡ハ惣て此須勢理毘賣命の御母子ハて



敷坐す国力如し大同美娶方須西利藥出雲国神門  
郡従八位上神門臣等之家傳方其尤者知加須西利比  
賣命所授也<sup>有も</sup>此社小就たる事ある可し神名式  
小那賣佐神社同社坐知加須西利比賣神社と見え  
る是あり其那賣佐神社ハ其夫神大國主大神小御在  
し坐べき御事申すも更あり其社記ハ所謂磐石者在  
神高倉明神是則祭大己貴命典須世理毘賣命式内那  
賣佐兩社是也云り但此ハ其通坐し御跡ある小就  
許築小坐る大神大后神社あり其本宮あり可なり又出  
雲凡土記ハ出雲郡御前社同御埼社有り共小並不在  
神祇官之云る六十四所の中ハ謂ゆる式外の神社

ありども今日日御前社之申して甚く御榮え坐り御  
事あり今も上社下社二所御在し坐り其上社を諸神  
記ハ祭神ハ東水神八握鬘尊者素戔嗚別命也蓋ハ握  
鬘生之縁矣<sup>見えたり</sup>相殿神三座田心姫命湍津姫  
命市杵島姫命<sup>有り</sup>素戔嗚尊者御璽を分て二神  
として合せて五柱神を祀奉りあり但風土記ハ御  
前社と有る前ハ埼の義ハ非ずて后ナリの謂ある也  
然ハ右の三神を本として斎ける者あり可し下社  
ハ謂ゆる御埼社あり諸神記ハ天照太神相殿五座正  
哉吾勝尊天穗日命天津彦根命活津彦根命熊野撥撞

△續後紀小美和九年九月壬辰朔乙巳隱岐國智郡由良比賣命神預言社と有り三代實録小貞觀十二年閏八月十九日壬申授隱岐國元位日乃賣神從五位下と有り此御神の事有り借日之賣神と申奉るは彼日神と素戔嗚尊會すの御誓言に依て成出せし御在り天降り御在り坐りし女神と申御事あり

日命と有り但當國者大日靈貴產生之地而今又有日當國の作り佐陀神社と此社ハ直興此の社あり故に風土記の奇事云々○神名式に隱岐國知夫郡由良比女神社和名須勢理姬命と有見元神名帳頭注大己貴命嫡后須勢理姬命と有か如し其由良と申す故由己小上三百九十四下小云了を合せ讀て曉る可し隱州親聽合記と云物小今薄子浦山岬小在り由良明神と稱す小社あり當國神名帳小從三位上田良姬大明神從四位上和田酒明神と二有以ハ此元名和須神ハ次ある海神社二座の下小在

△此和須神と申す所由傳十二年三月二十一日又△但大同類聚方十五卷小和多須神隱岐國知天即由羅比賣神社仁傳流傳之方と有り

心さありと云るハ然る言あり周吉郡賀茂那備神社水祖神社御在り坐ハ山城國賀茂別雷神神社賀茂御祖神社の例に依り此水祖神社決く玉依姬命の御在り坐せハ右の一宮と同神あり其賀茂那備神社今在鴨村之東稱鴨明神と云ハ其近傍小御在り可し同郡玉若酢命神社隱地郡水若酢命神社名神右玉若水奉り水其玉の瑞々しき以て大己貴命出其成坐る物寔を以て稱申すハ若酢ハ和加須世理比賣命と申す御名を約めたる事上二百十小云る五丁ハ云るか如し右の玉若酢命神社を總社と申し水若酢命神社を當郡以て一宮と申すハ右の一宮由良比女神社

開元八月廿九日壬申授  
藤原正六位上藤原  
若酢神從五位下

△統後紀嘉祥  
二年二月辛亥朔  
壬子播磨國佐用  
津雅神預官社  
見白

又同神御在坐證例小立心所愚  
右の玉若酢命神社、周吉郡下西村の北に在り此  
社の事無き御社有る事知れり水若酢命神社に  
隱地郡一宮村に在り一宮社と云ふ崇徳天皇を祀り  
成し奉り有る相殿と云ふ山陽道に神名式に播磨  
國佐用郡佐用都比賣神社坐り定栗郡小伊和坐大各  
持御魂神社大神大倭物代主神社と御在坐小合  
世考る古事記に市寸島比賣命亦御名謂狹依毘賣  
命又見えたり其神の御在すむ和名板郷名小  
佐用典と有る此神名小因り地名あり然る小土人  
不見えたり大伴佐提比古の妾あり松浦佐用瓊面  
り云るハ同名ある依て然思混たりむを更小

△播磨國安藝相記  
有女名私浦佐提  
大伴辰彦女大伴佐  
提彦妻也彼彦為  
渡唐出松浦川渡  
時佐提彦登松浦山  
正嶺望佐提彦船  
船漸去行不堪則思  
投出頭而振之  
仍此山頭山  
或云佐提彦遂不  
歸而死于唐法興  
媛聞以悲歎泣愛  
餘未而死此地云  
故祭以神云此  
附言あり

由無き事あり此社今長備前國赤坂郡鴨神社三座宗  
谷村と云ふ在り云り備前國赤坂郡鴨神社三座宗  
形神社有り和名板小葛木御有ハ大和國葛上郡の鴨  
小故有る小也宗形神社ハ其御祖神小御在坐せハ  
共小祭り給へる可し此社今是里村小在と云  
り又津高郡鴨神社賀茂村と云ふ坐を和名板小賀茂  
郷見えたり宗形神社今大窪村小在と云ふ猶邑久郡  
上道郡大神と社四座見島郡鴨神社御在坐一又邑  
久郡片山日子神社有ハ山城國愛宕郡片山御子神社  
大月次相嘗新嘗と見えたり謂ゆる片岡神小賀茂  
建角身命の御女の丹塗矢小娶ひて生給へる神あり  
小聞ゆ○神名式小安藝國佐伯郡伊都伎島神社大神  
諸社根源抄小安藝國佐伯郡伊都岐島社名神大市杵

島姫田心姫湍津姫以上三座と見えたりども市杵  
島姫命を主として祀祭る事其社号を以て知べし偕  
此三女神の生坐る次第ハ上二百十の註るか如く長  
ハ田心姫命中ハ市杵島姫命ハ湍津姫命ハ御在し  
坐を此ハ一第二一書ハ市杵島姫命田心姫命湍津姫  
命ハ次序又第三一書ハ瀛津島姫命亦名市杵島姫命  
と有る傳ハ依て祭来れども見えて清和天皇実録貞  
觀元年同九年の神階の度ハ伊都岐島神と有る合せ  
て別ハ元年三月廿六日壬午授安藝国正六位上伊都  
岐島中子天神從五位下と有るハ此ハ田心姫命ハ

當り同九年九月十三日戊寅授 安藝国正六位上宗  
形ハ專神從五位下と有る其長女中女ハ對へて少女  
を小專ヲシラと云ふて此ハ湍津姫命を申せるあり  
實ハ田心姫命ハ長女ハ坐ハ市杵島姫命ハ中子  
ハ當る物と一傳の方を取て神階の事ハも及ハれ  
しあれハ今難むるハ非れども正しく三女神の次  
第を云時ハ右ハてハ叶ハざる者あり湍津姫命ハ御  
事ハ小專ハて當れり其末女ハ御在し坐セハあり專  
和名披ハ日本紀云專領二字讀ハ太字女子佐女今呼老  
女為太字女と有るハ土佐日記ハ一人太字女一人  
と並云を思ふハ宇ハ久の音便ハ長女と云事ハ  
て年老ハ長たる人を云るハ物ハ任たる謂ハ非

△諸社報源抄推  
 古天皇委五現此御  
 在坐于船中中女  
 房三人御出現洗米  
 参りま可一其數  
 廿三参りせ佐伯  
 鞍職御供りて高  
 島中の中御思賀  
 島中の中御思賀  
 とも服の浦笠の濱  
 を御覽見し御殿  
 造有りに見え

るあり又淡路の太宇女と云も見え源氏東屋巻中伊  
 賀の多宇女と云も有り何れも老女を云稱あり者  
 り右ありて三女神共の御在し坐す御事明らう見え  
 たり巖島道芝記と云ひ引る野坂房顯記小宮殿造營  
 推古天皇端正五年大宮御前ハ三女神客人御前ハ  
 天照大神ありと云ひ又傳記曰推古天皇端正五年十  
 一月十二日内舍人佐伯鞍職釣干恩賀島船来西方張  
 紅帆舟中有瓶々中有鋒著赤幣有三神女曰我名巖島  
 大神守護百王鞍職怪問曰以何為信女曰王城星現而  
 鳥舍押枝於是鞍職奏事果驗帝寄之勅建宮社云々と  
 見えたり此時ハ三女神の鎮り御在し坐べくして

国来し幸行るふ就てハ様ハ奇異しき事共の見ハ  
 此給へるあり予前ハ周防国人ハ聞くと佐婆郡三  
 田尻と云ハ巖島の舊社有り傳云宮島神筑前より移  
 坐す時ハ暫時御在し坐し宮趾ありと云ハ 郡ハ  
 島と云有り其も巖島の元社ありと土人の傳ふ  
 るや其時の御事ありけむ此ハ就て案ふハ其佐伯鞍  
 職の子孫の氏を野坂と云るハ和名抄御名ハ筑前国  
 宗像郡野坂乃佐と見えたり地名を取れりと聞ゆ  
 ハ其恩賀島本ハ筑前ハ在りの中津島の事あり可し筑前国統  
 風土記ハ安藝の巖島ハ市杵島姫命を彼所ハ勸請す

彼縁起ハ自筑前国恩賀島来于此云々ハ有リ斯以  
ハ其筑前ハ勸請以る事を右の傳記ハ怪ハ書  
 成リ小ハ有ハべきハ右の端正五年の説ハ宮島名勝圖會  
 元年ハありハ推古天皇元年癸丑ハ其五年ハ當リ神聖  
 德太子傳ハ推古天皇即位元年十一月十二日明神初  
 て現レ給フ田を載タり此説據ハ有ル似タり云ハる  
 然レも有ハべき事あり嚴島舊記ハ推古天皇即位元年佐  
 伯鞞職官奏を經テ宣下を蒙リ御笠濱ハ宮柱ハ敷立  
 高殿臺照耀キ高橋浮橋ハ天鳥船造立テ泰クも御田  
 年即推古天皇元年ハ給フ云ハるハ云ハるハ此を以テも端正五  
 年ハ王城星現ル有ハ星ハ天の象物ハ少ク輒ク出ル未ル物  
 給フ事ハ然ル云ハるハ給フ鳴ル又思賀島ハ大神島ハ事  
 後坐リしハ其称ハを用フあるハ可ク上リ三百七十四丁

ハ引ル江島社記ハ大己貴年ハ共ニ延喜年ハ合シカシ經營相  
ハ摸ル江島安藝嚴島駿河御嶽ハ有ル若シ其ハ実ハありハ神代  
ハありハ布ハ杵島姫命ハ此ハ鎮ル所ハ祭ル石ハ云ハるハ如ク市杵島  
ハ坐スべき幽契有ル事共ありハ所ハ祭ル石ハ云ハるハ如ク市杵島  
ハ姫命を主トして中子天神ハ田心ハ小專ハ神ハ湍津ハの三座ハ小  
ハ渡ルせ給フ事申スも更ニありハ故ハ正殿三座市杵島姫命  
ハ田心姫命湍津姫命相殿三座国常立尊天照皇太神素  
ハ彥鳴尊客神宮五座正哉吾勝ニ速日天忍穗耳尊天穗  
ハ日命天津彦根命活津彦根命熊野櫛樟日命ハ云ハるハ然  
ル也ハ大官相殿ハ天照皇太神素彥鳴尊ハ三女神ハの  
ハ御祖ハ渡ルせ給フハハ尙ウるハ可クきを国常立尊ハ心得  
ハぬ事あり思ハふハ上リ二百十ハも粗ク云ハるハ如ク中昔ハより

伊弉渡遇宮小御在坐す豊受大神を一も御饌都神  
と申奉りしを偽りて或は天御中主尊とも国常立尊  
とも云標めたる説の弘りて天下悉く其惑一説の  
迷居たる時節ありけり此三女神の持斎き御在  
坐す御饌都神の御在坐をも然らずと僻心得て国  
常立尊との唱来りしあが有む又當社第一の摺神小  
大元神社と申有り其をも国常立尊と申せども同ト  
く其御饌都神小御在坐して此三女神の御為一殊  
小止事無き御神小渡りせ給へる御事を明一の奉り  
可き者あり尾張人吉田忠房と云者の筑紫紀行小記

此の、大宮六座を中天照太神素戔嗚尊左天満天神  
大國主命右三女神国常立尊と有も杜傳一有べきが  
此の、三女神を一座として右座ある事疑ふ可一と  
虽も国常立尊と並給へる、三女神と御饌都神と親  
しき神小御在坐す故一然傳たるあり下り引る清盛云  
の夢一或僧の  
安藝国嚴島と越前国氣比と西海北陸異  
ありと虽も金剛胎藏の両界小唇言ふと云る、  
合者の説りて取一足さる事あが、氣比宮ハ保食神  
小御在坐して謂ゆ、御饌都神小渡りせ給ふが故一  
殊小親しく御在坐を以て然る説も出来りあり

心を思合す可一十四百一の説く紀伊国伊都郡丹都  
 比女神社名神大月を今四所明神と申せる其第三宮  
 氣比神第四宮巖島神小渡とせ給へるなり皆其由縁  
 小因る者ありて此の二座を合せて八神あり然  
 も三女神を合せて一座と為る故に大宮六座あり然  
 此の二座を合せて八神あり然  
 岐島中子天神伊都郡岐島宗形小専神と三神の御名出  
 其左の二神の皆由有る神等坐せし後小加へたる  
 在し坐つるあり可し其大國主神の御事あり  
 夫神の渡り給ひ天満天神の管家の御事あり  
 べり指間より大漏給ひ社進次第記す此故傳日字間天  
 の指間より大漏給ひ社進次第記す此故傳日字間天  
 神と有るに坐す事大國主神の御事あり  
 並び御在し坐す事大國主神の御事あり

抄小安藝國巖島社、後、山深く茂り前、海左、野  
 右、松原あり東の野小清き流有り此を御手洗と云  
 ふ御社三所御在し坐す又、少、前の方小引退きて南  
 北へ三十三間東西、二十五間の廻廊侍る潮の満つ  
 時、廻廊の板敷の下迄海不成る潮の引く時、白沙  
 五十町許あり然、有れども潮の指たる時、参れ、船  
 小て廻廊の下迄参るあり氣高く甚、下、事、譬へも無  
 く侍る但如何ある御事や、玉、御簾の上、御正体  
 の鏡を掛参るせて御簾の下、懸参るするあり彼御  
 神、女体の神、御在し坐すあり、此、習、ハ、セ



るやうむ大抵ハ御社ハ山上ハ上り廻廊ハ平地ハ在  
り東西南の三方暗度ハ殊ハ心も澄侍る所ハ鹿を狩  
ざら御山ハハ牡鹿鳴き草ハ露落方何心無き人も  
此御社ハハ心ハ澄あるところ申傳へて侍る之有  
ハハ當昔大宮の正殿三社並ハ御在ハ坐ハありけり此ハハ  
客神宮の御事を云ざらハ正殿三所の之ありしと  
思ふハ然らず高倉天皇御幸記ハ廻廊の北の邊を巡  
りて参る廊を通りて参らせ給ふ略中上達部殿上人御  
供ハ候す客神宮ハ先参らせ給ふ金銀の幣二捧白妙  
の幣神宮取て宝前ハ並ハ立つ拜殿の内の程高麗ハ

半帖一疊御拜の座ハ金銀の幣ハ兼光の辨傳へ取  
て隆季の大納言傳へ取て参らせ御拜畢りて歸らせ  
給ふ祝師賜ハる御琴一御琵琶一御拍子横笛受取て  
宝前ハ並ハ置く内侍共色ニ様ハハ装束きて錦を裁  
着たり縫物せし服も心も及ハず御神樂畢りて大宮  
へ参らせ給ふ略下見えたるハ客神宮の古くあり御  
在ハ坐ける御事著明くあり有ける然ハハ西行のハ  
ミを云るハ客神宮を云ざりハあり今ハ本殿を一  
棟ハ建ハりて内ハ中左右ハ別ハ御在ハ坐るを當  
昔ハ三棟ハ並ハ建ハりてハ故ハ右ハ御社ハ三所御  
在ハ坐るハ云ハるハ一社ハ祀奉る例ハ山城國  
の平野梅宮大和國の春日宮也旧社ハ多き事あり  
けりハ嚴島ハ大宮正殿ハ本ハ三社並ハ御在ハ

坐けり官社として崇め奉りて給へる世の迹の類  
聚国史日次弘仁二年七月己酉 安藝国佐伯郡  
伊都岐島神預名神例集四時幣見之清和天皇実録  
小貞觀元年正月廿七日甲申奉授安藝国正五位下伊  
都岐島神從四位下同九年十月十三日戊寅授安藝国從  
四位下伊都岐島神從四位上と有り然るも今正一位  
の神階の御在し坐すの其あり次々増加へ奉りて  
給へるあり然るも今の如く大く栄えさせ給へる始  
ハ源平盛衰記平家物語等ハ鳥羽天皇の御時平相国  
清盛公當国の守護たりし頃高野の大塔を脩造せし

けり七十七有餘の老僧清盛ハ申さけけるハ此大  
塔の造営ころ却すこと神妙なる爰ハ又一の願有り  
抑安藝の巖島と越前の氣比とハ西海北陸境異ふれ  
ども金剛胎藏兩界として愛なき所にて侍るあり氣  
比宮ハ繁昌すと云へど巖島ハ荒廢せり汝須く早く  
修理を加へ崇敬を盡さば我身の榮華子孫の繁昌た  
る可いと云ふと見えしハ一場の春夢ハ有ける清  
盛奇時の思を成し下山の後院参りて右の夢想を奏  
聞し任を延て當国ハ下り新ハ殿宇を改造し百八間  
の迴廊を起し島居を建搆社末社ハ至る迄壯觀舊ハ

勝り修理功畢りて清盛大宮の參籠せしけり  
 天童忽然として現れ来り我は是大明神の御使あり  
 此劍を以て朝家の御固を為すべしとて銀の蛭巻を為  
 する小長刀を賜ふと見て覺し不實なり頭邊の劍有  
 ける但惡行有るは子孫迄ハ叶ふ事とぞ御託宣有  
 ける略々有り此より清盛公朝廷の御外戚として大  
 政大臣位に歴任し一門挙りて世に盛えける事  
 偏り此神の御惠あるが故に甚く崇尊はれしは公  
 家にも大の尊と敬いせ御在し坐す御事あり然りば  
 此御社の中興は右の平大政大臣にて御在しける

△恒例の神事を  
取行ふ

△贈る由家ハ云々  
せざる取不遣一ハ  
るハ若し重兼

然るハ安藝の国守と御在して先第一の部内の諸  
 神を安藝の料を以て高野の大塔を修造せしけり  
 勅命ありて止事を得ざる所あり然るに空海も然る者  
 あり故に其本を為るに塔を建するに荒廢の事あり  
 を指して我ハ大塔を建するに荒廢の事あり  
 者ありて法師共の係り及む故に此殊勝の教あり  
 神社の荒廢せざるを棄てて塔を修造する所あり然る  
 法師も我ハ天皇尊の大御民ありは然るか悦ぶ  
 の事あり亡友新井俊功が形見として藤綱俊が鍛  
 る長巻と云ふ小長刀を由村美彦持故り其よりして  
 来りしも此節より甚奇異くあり思ゆる  
 公家の御崇敬其右に出る者無しあり百練抄に治  
 養二年戊戌六月以中宮有身奉幣巖島社と有り山槐  
 記ハ同二年十一月十二日内大臣被奉馬於諸社臨其

時引立西門外侍等相具参向所云、但大神宮御馬  
被<sup>有</sup>在京之祢宜伊都岐島御馬又付在京神主云、大神  
宮二足<sup>略中</sup>伊都岐島一足云、<sup>有</sup>中宮御産の御祈  
と賽謝との御事依以るあり又百練抄治兼三年  
二月廿四日以安藝国伊都岐島社可加二十二社之次  
弟并祭礼日事等有其沙汰右大臣兼實以下大外記頼  
業師尚等預勅問計申之以二月十一月上申日可<sup>為</sup>祭  
礼日之由被<sup>定</sup>仰先議公卿之有<sup>り</sup>然<sup>り</sup>小山槐記<sup>同</sup>  
二月廿九日被<sup>祭</sup>遣祈羊穀奉幣安藝国伊都岐島可令  
列二十二社之由有沙汰頭中將通親朝臣被<sup>仰</sup>下云

而猶彼社祭日只可令預官幣之由有議止二十二社列  
之所見た<sup>れ</sup>ハ終<sup>ハ</sup>二十二社の次弟ハ加<sup>ハ</sup>せ御  
在<sup>一</sup>坐す成<sup>ハ</sup>た<sup>る</sup>者あり<sup>前</sup>芝記<sup>ハ</sup>拾<sup>ハ</sup>枚<sup>曰</sup>諸社三  
是奉幣使<sup>社</sup>也云<sup>又</sup>曰<sup>年</sup>中行<sup>事</sup>ハ正月<sup>下</sup>亥日<sup>伊</sup>都  
岐島祭被<sup>奉</sup>官幣使<sup>但</sup>近代<sup>無</sup>其沙汰<sup>云</sup>今<sup>按</sup>る<sup>ハ</sup>正  
月下<sup>亥</sup>日<sup>伊</sup>都岐島祭<sup>被</sup>奉<sup>官</sup>幣使<sup>但</sup>近代<sup>無</sup>其沙汰<sup>云</sup>今<sup>按</sup>る<sup>ハ</sup>正  
御祝師社籠<sup>有</sup>是<sup>二</sup>月初<sup>申</sup>日<sup>お</sup>て<sup>十</sup>日の間<sup>嚴</sup>島<sup>ハ</sup>て<sup>上</sup>  
国府<sup>ハ</sup>於<sup>て</sup>上<sup>御</sup>斎<sup>戒</sup>右<sup>の</sup>如<sup>し</sup>然<sup>レ</sup>ハ<sup>正</sup>月<sup>下</sup>亥<sup>日</sup>ハ  
官幣使<sup>都</sup>を立<sup>給</sup>ふ<sup>の</sup>日<sup>ハ</sup>や<sup>マ</sup>云<sup>ハ</sup>右<sup>の</sup>国府<sup>の</sup>上<sup>御</sup>  
の事<sup>ハ</sup>次<sup>又</sup>山<sup>槐</sup>記<sup>ハ</sup>治<sup>兼</sup>三年<sup>三</sup>月<sup>廿</sup>六<sup>日</sup>被<sup>遣</sup>伊<sup>都</sup>  
岐島奉幣上卿三條大納言實房辨藏人右少辨光雅藏  
人中宮大進基親申沙汰之使左中將重衡朝臣去年中  
宮御産之時始被<sup>立</sup>奉幣使同重衡朝臣<sup>于</sup>時<sup>左</sup>馬<sup>御</sup>願

趣見宣命後聞使翌日下向略中天皇我詔旨止掛長支伊  
都岐島大神乃廣前尔恐美恐美申給者久申夫本朝者  
神国利振古以降太聖主哲君无皆依神之冥助且專仰  
国之緝熙久暫以改身且天乃日嗣并傳給倍夕惕之思  
此年序多積利爰大神者殊致鎮護於国家志廣垂靈眷  
於民俗留因茲且去年敵情乃中尔有思食事天令祈給  
而處尔御意乃任尔相叶倍是偏尔神德乃所及止奈利其  
由并報賽免世志給比兼又殊有所思天始自今年十一月  
申日天每年乃二季御祭尔限以永代天幣帛潔妙尔謂  
飭且可令祭遣給奈弥益尔廣惠美厚幾御助并令施給

給倍所思給天奈利故是以吉日良辰并見定且正四位下  
行左近衛權中將權東宮亮平朝臣重衡并差使且礼代  
乃御幣仁金銀乃御幣并相副天令捧持且奉出給布大  
神此狀乎平久安久聞食天聖曆惟遙尔御体又穩尔天  
皇我朝廷并宝祚無動久常磐尔坚磐尔夜守日守尔護  
奉給天北關之聖壻尔赤松論筭志東關之璫砌尔青椿  
献羊天凡不鳴條須雨無破塊久五穀豐登尔四海愷樂  
尔護恤給止恐美恐美申給者久申治承三年三月廿六  
日大外記業実草之有如く二月十一月上申日の  
大祭每并官幣の汝汰有事之見ゆ此上申を以て祭

日て被定たるハ山城国松尾神社二座の中ハ胸形中  
 都大神と申すハ上三百下十ノ註セリガ如ク市杵島姫  
 命ハ御在リ坐テ當社ト同神ハ坐を其祭日ハ四月十  
 一月上申ありけり其申を用ひて四月を二月ハ  
 被換たる者あり右ハ引了拾枚ハ近代官幣使の  
絶たりし者ト見ゆ今国府ハ由所氏ト云有る此を  
卿ト云て二度の大祭ハ必奉幣代を勤むる由ある  
ハ其状を擬ひた天神御子の參詣させ給へる御事三  
 度有り百練枚ハ兼安四年三月十六日後白建春門院  
 臨幸安藝国嚴島四月九日還幸云々ト有り次ハ治  
 兼四年三月十九日新院高嚴島御幸ト有り此事山槐

記ハ新院令參安藝国伊都岐島給四月九日還幸略下  
 有り其時の御幸記ハ土御門内大臣通親公の作あり  
 又百練枚ハ治兼四年九月廿一日新院御幸嚴島茅二  
 箇度也云々古今著聞集ハ治兼四年九月嚴島ハ御幸  
 有けり御願文自御草有テ殿下普賢清書為させ給ひ  
 けり布代の事ハや彼御願文殊ハ愛たりけり後  
 日ハ藏入宮内少輔親経表を書て奉けりとおむと有  
 り其後ハ行幸御幸の事共ハ見えず物ハ見えずト云  
国ハ行幸ハ御時ハどもや詣させ御在リ坐けむを嚴  
島ハ大神の先ハ清盛公ハ惡行有リ子孫ハ計りハ神ハ  
おハ諭給へりハ御事を所思ハ何計りハ神ハ  
哀れハ見奉りせ給ひけり未知ハ御在リ坐さる御

△社傳の惣ては幡  
別宮と稱して深  
き旨有しと云ふ  
宇佐と三女神の  
同体と渡りせ給  
るが故あり若て

程のて何の事も所知食し辨へさず御在し坐せれば  
殊小痛おしとも何とも云む方無き曲事あるに有け  
る今思出る任小女に記奉りて右ハ内宮の御事を説  
奉りるあり其外宮と申すハ道芝記ハ地御前大明神  
大宮御本社六座客神宮五座御神号内宮同前也此御  
社嚴島の海面を去る事三十六町佐伯郡の海濱の鎮  
坐し給ふ即地御前村と云ふ社頭造立ハ嚴島同時ハ  
して嚴島を内宮と稱し地御前を外宮と稱すと有り  
其年中行事を見るハ年中度しの神事ハ嚴島より社  
家中渡海して外宮地御前の御祭任奉るハ其遙宮を  
るが故あり 就中六月十七日夜大宮より管絃舟を職  
ひて渡り事を内宮の御神を外宮の行事

△又同郡速谷神  
社名神大新嘗  
有ハ三女神の成坐  
り物根を作し  
大明神命坐  
る所以傳二十卷  
九十二下ハ云り考  
合す可し

成し奉るハ神事あり祭神也 ○又神名式ハ安藝国  
何ハ本社ハ亦ハ異る事無し △  
安藝郡多家神社 各神 ハ今府中ハ御在し坐を此多家  
ハ田心姫命湍津姫命の田心又湍津を約めたる者  
可し道芝記ハ八幡別宮御社三座安藝郡府中ハ在  
り當国三宮多家神社の境内ハ坐しす抑ハ幡別宮と  
号し奉るハ筑紫宇佐宮を移し三女神を祀奉るあり  
と云ふハ其三女神を八幡ハ祭るを此ハ本社ハ  
三女神の事を別ちて八幡別宮と云来りりと思ゆれ  
ハ此を以て本宮の神を明しむる便宜とハ成れる者  
あり同書ハ玉依八幡宮廣島堀川白神大明神の境内

△津濃郡國津姫  
 神社今富海清  
 云々云々御在  
 坐旧社云々所祭  
 二神云々像大神  
 して渡り御在  
 坐云々借同郡  
 海を隔て、尾鬚  
 島と云有けり云々  
 市村島神社儀前  
 時止此島止り御

の勸請す凡て玉依八幡宮と号し奉るハ八幡別宮小  
 同トマウヤ云るをも考合す可し此神社ハ古事記  
 神武天皇殿於阿岐國之多祁理宮七年坐之有る地  
 ありハ多家ハ多祁理の約れりあり多祁理ハ田心又  
 田霧の 轉れり者ありク  
此天皇の御軍の時小宗  
 像大神の御恩頼を蒙奉  
 りせ御在し坐し之所思しき事已ハ上三百四十一丁  
 小云るガ如くありハ此也 其神社を以て行宮と為  
 させ給へるあり可く也有む又神名式ハ土佐國安藝  
 郡多氣神社考ハ在奈半利村藏明神と云る也  
 多家ハ多氣 ○周防國式外ハ佐婆郡勝間神社と云ハ  
 あり證あり  
 旧社有り東佐婆勝間村ハ在り濱宮五社社大明神と申  
 せり其社記小本殿第一田心姫命湍津姫命布杵島姫

在し坐し給へり其  
 今し言柱基神  
 任備て三給へり  
 島回凡二里許ヤ  
 有し山岩を登りて  
 登りて山の如くして  
 松樹叢生立ち難大  
 生茂りて得も云ぬ  
 生茂りて得も云ぬ  
 一ノ水清、瀟瀟り  
 て清き事云許り  
 無一人家ハたふ  
 魚ハ少くも汚  
 した事無ア、愛  
 せし比すハ、無  
 神境、うひ有け  
 り予も唐土手愛  
 山田豊頼ハ、其  
 諸奉りて殆と取  
 を儀ハをも思許  
 云々、尊く思え  
 ころも又

命第二豊玉彦命第三保食命第四級長津彦命級長津  
 姫命第五水分神右瀨宮五社也外有相殿人麻呂社社傳云景行天  
 皇十二年熊襲御退治の時九月五日當佐婆小着給ハ  
 所南方ハ煙多く起れるハ依て賊必有むと思食し使  
 を遣ハして其狀を令見給ふハ竟して神夏磯姫と云  
 有り其徒衆甚多ハ略因茲て自軍平安の爲劔玉誓の  
 三女神を祭給ひて終ハ賊共ハ打勝ち悉く退治し給  
 ふハ依て此所を勝間と云ふマ有り此事御紀ハ出た  
 り事ありハ勝間の説ハ其社ハ傳ふる古説あり此佐  
 より御船發し給へる事ハ周防國風土記ハ昔日纏向  
 日代宮御宇天皇欲誅球磨贈幸於筑紫從同防國佐婆



津放船而渡豊国宮浦之見元豊後国凡土記也右  
同文有て未を渡泊於海部郡宮浦之有り又昔日代  
宮御宇天皇御船從周防国佐婆津祭而渡之遙覽此国  
勅曰彼所見者若国之境因三國境郡之有る何れも  
御紀中引合ふ然此勝間神社之宗像三神を斎奉れ  
る御社ありけり神主鈴木高鞠が寫持たる玉祖神社  
藏建武二年の古文書小濱宮御祖社一問四面之有ハ  
上三百五十九丁云了賀茂御祖神社小其三女神を合せて  
玉依姬命とも姫大神とも申して其即御祖神あると  
同例あり又享祿年中作周防国廳年中行事次第小正  
月三日目代殿春日惣社大明神瀛宮天神大崎一宮彼  
五社御参詣也と見えたる式外ハ坐せとも貴き

御社ある事申すも更あり但此文混じり社大御神三  
小濱宮ハ此勝間神社あり西小天神と有ハ御神  
防府の天満宮あり五小大崎一宮と有ハ御神  
事あり例祭六月十七日一晝夜風鎮の御祈有りと云  
ハ第四級長津彦命級長津姫命ハ風神ハ坐せ其神  
ハ屬たる祭あり可し又九月十一日十二日ハ秋祭  
りあり安政元年予筑紫より歸り宮市ハ在つる時  
原田光實を案内て其海濱ハ御幸成り奉り拜見  
奉りけり然れども三田尻ハ立寄て嚴島の旧地を見  
ばさころ今思へば遺和名抄郷名ハ佐婆郡勝間加都  
憾しき事ありけれ  
（長御者天小勝間神）  
と有り清原元輔家集ハ周防国ハ侍る勝間の驛と云  
ハて子日し侍るとして思ひ出よ千世の子日の今日毎  
ハ勝間の浦の岸の姫松（と有り又）千早振る勝間の宮の姫小松  
老を手向て仁奉るむと有り此歌今の板本ハ見え

ず澄日か歌枕名寄此歌出たりと云り防府天満宮  
程防州勝間の浦中著せ給ひける一夜の御旅寝怪  
ハの海人の苦屋目馴ぬ御住ひ唇へ方無き状あれ  
ハ云と云り有〇神名式中紀伊国伊都都丹都比女神社  
名神大月今天野丹生四所明神申して所祭四座  
次新嘗南紀名勝志天野神社一之宮丹生都姫神二之宮  
高野大明神三之宮蟻通大明神四之宮巖島大明神と  
 見えたり此中も宗像大神ハ御在坐りありけり  
 此御社の御事己傳九三十四五十の云り名勝圖  
宮氣比大神四宮巖島明神二座勸請の由来ハ兼元年  
間丹生明神行勝上人告給願く越前の氣比安藝  
の巖島の二神ハ我古の親友たり願くハ一所在て  
審教を擁護一又異国征伐の時羽翼の神將と為る也

神本記ハ  
 生國魂大國玉命  
 有り

丹生の祝命ト我ハ殿中ハ勸請す可しと宣へ  
此ハ依て二神を此ハ合祀し四社相並べり四  
所明神と稱すと云ふ傳を載たり也又名草郡志磨神  
甚古く往昔の鎮坐あり可し  
社名神和名狹小島神戸と有る是あり社傳小祭神中  
津島姫命相殿生國魂神と有り地神本紀小市杵島姫  
命亦名佐依姫命亦云中津島姫命坐宗像中津宮是所  
居于中島也と所見たり此神ハ坐り今も中島村ハ  
坐と云も據有る事あり其相殿生國魂神と申すハ大  
国主神ハ御在一坐て其夫神ハ渡りせ給へとも此ハ  
てハ客坐あり事上三百五十九下ハ云る賀茂御祖神社二座  
の例ハ相同し者あり仁明天皇御紀ハ兼和十一年

△予り此神代御  
父大神の從事  
給ひて此國御在  
坐所城の由後  
小筑前より招奉  
らるしり傳手八  
卷百十八丁三十一  
奉りてい

十一月己酉朔辛未奉授紀伊國從五位下志摩神正五  
位 一見之文德天皇實錄嘉祥三年十月乙丑紀伊  
國志摩神並加後四位下之記さし三代實錄小貞觀元  
年正月廿七日甲申奉授紀伊國從四位下志摩神正四  
位上あり有り 當郡小此大神の御在し坐す由未詳ふ  
志摩神社とい申すある可し正の註せる大和國城  
上郡宗像神社三座を中島辨財天と申す此小同  
坐す事大由有り 又紀伊國式外小名草郡市姫神社  
有り紀國神社録小市姫大明神 在痛見 所祭嚴島神と  
云ひ又那賀郡大市姫神社祀神一坐大市姫命相殿二  
坐素戔鳴尊  
大山祖命 攝社大和大明神社祀神大國御魂神と云

此相殿神を以て説を成す時ハ古事記ハ所見たる  
宇迦之御魂神の御祖小坐せとも攝神を以て申す時  
ハ右の市姫命同神めて正しく市杵島姫命小御在し  
坐つ可き事上 三百六丁の註せるか如し 但右の大市姫  
垣内云ふ立せ給へるを其復神ハ黒木村小坐と云  
り然離れたる地ハ坐神の攝社と有る事殊小止事無  
き由緒御在し坐つ可けり此も ○神名式ハ淡路國  
大ハ枚号めて坐ハ市姫命あり ○神名式ハ淡路國  
津名郡賀茂神社由良湊神社見元和名枚郷名ハ賀茂  
加マ見えたるカ郷名ハ廢りたれども今猶賀茂村と  
云ふ存り此由良も上 三百九十四丁の註るか如く由  
良比女命の例めて下鴨小坐す御祖神と同神小御在

し坐めり其ハ延喜式ハ由理駅之云地ハ一ツ今猶由  
良浦之云ハ在り又築狹神社今千草村之云ハ坐ハ若  
クハ筑紫の轉ルル所也又下鴨社ハ古文書ハ淡  
有テ古賀茂の神領あり之云ハ生穂村佐野村今猶  
有テ其生穂の支邑中之内村之云ハ白鬚大明神ハ  
申テ舊社有リ所祭白鬚大明神賀茂春日の四神を祀ル  
故ハ四社神明神と申セリ山域の賀茂ハ同トル  
テ物事を齋清マハル状あり甚ハ重キ中ハ家カ母  
屋を瓦葺キ為リ時ハ忽キ現罰有リ甚ハ神威の尊  
ク可畏ク御在リ坐ス社あり之人皆大ニ恐ル又  
云リ此ハ御祖神賀茂神ニ所ある事云も更あり又  
淡路国ハ辨財天と申一ツ年毎ハ村々を轉巡リ給フ  
宗像大神御在リ坐リ今御形ト崇クハ女神を畫ケル  
掛軸あるガ十月の中亥日ハ例祭を営ミテ其夜直

ハ来年の祭ト成ベキ村ハ供奉ウテ近キ所ハ其  
翌子日遠クハ丑日ハ祭初テ来年の十月中亥まで九  
一年の間仮宮を建て齋奉ルルを其祭ハ正月七日ハ  
春祭有リ六月七日ハ出干マテ祭有テ其迎申セリ日  
ト合せて四度の祭あるガ其日ハ近国よりハ参詣ル  
人夥シク有テ淡路国ハ二無キ大祭あるガ故ハ  
其費も多キ事ありども餘りも不足ト為ズ之云リ此  
神を俗ハ云ふ福神マ一ツて祭ル事あるガ實ハ其如ク  
之云ハ古ナリ彼国ハ宗像大神の御在リ坐テ島中を  
巡ルセ御在リ坐リ各殘を傳へテ祭ル者之所見ナリ

傳十四 五丁十の云るが如く豊受大神の初て天降坐  
るハ彼国ハ有ルハ故有る事ありむ  
祭ハ依て彼国二百八十村二十四浦の内我も其内闈を以  
て定むる事ありて郡吏ハ訴ふる事あるが其内闈を以  
ふて定むる事ありて郡吏ハ訴ふる事あるが其内闈を以  
其傳未今詳あり古しき事あり○神名式ハ阿波国美島郡  
鴨神社多寸神社有り阿波国神名帳ハ云物ハ鴨神社  
今阿波郡中野村賀茂別雷皇大神宮ハ云有り又同郡  
加茂村ハ賀茂神社有り又鴨宮村加茂大明神有り  
云り右三所の中何れハ其ハ今定む可くす田寸神  
社ハ同書ハ阿波郡加茂村ハ在り云此ハ右ハ賀茂

神社ハ同處ハ在り又知名枚御名ハ美馬郡大島  
之ハ云ハ曾肩の中津島を大島ハ云る其ハ因りる  
萬ハ然ルハ地理の事ハ外より推量も成ざる者  
田寸ハ田村ハ思へども若鴨神社ハ又式ハ讚岐  
由有る神ありむハすハ伎ハ有べし  
国寒川郡神前神社今神前村遊良山ハ云ハ御在り坐  
て神前八幡ハ申ハ云る相模国高座郡寒川神社  
大を一宮記ハ八幡宮ハ記せるハ合るハ其遊良山ハ  
例の由良ハ同ハけハ玉依姫命の御事あり又阿野  
郡鴨神社神谷神社坐も由有る神等ハ坐を考合す可  
右の鴨神社ハ和名枚御名ハ阿野郡鴨部加毛ハ有  
り今鴨村ハ云も有り云り神谷神社ハ丹後国熊

野郡の坐るが大同類聚方の神谷久須利丹波国云  
又神谷藥云く其原波大已貴乃神方也と有るをも思  
合す又伊豫国越智郡多伎神社大神和名抄の同郡鴨  
部郷有り由有る事有る可し三代実録の貞観二年十  
月十七日癸亥授伊豫国従五位上瀧神從四位下同八  
年三月七日壬子追伊豫国従四位下瀧神從四位上同  
九年二月五日乙亥授伊豫国従四位上瀧神正四位下  
同十二年八月廿八日戊申授伊豫国正四位下瀧神正  
四位上と有り但此の瀧神を今本の龍神と作りて  
階の次第を逐ふ時ハ右の如く○神名式の筑前国宗  
合るが故の今改めて引るあり○神名式の筑前国宗  
像郡織幡神社一座大神統凡土記の所祭中座武内大

臣西ハ住吉大明神東志賀大明神ありと云る社  
傳ひても有へけぬとも決く宗像大神の御在し坐へ  
一宗像社説の宗像三社の織幡許斐を加へて五社と  
云ふ弘大寺を加へて六社と云ふ稲庭上を加へて七  
社と称すと云るハ更あり上三百二十八丁の註せる對馬国  
上縣郡三根郷佐賀村宗形神社の社傳の古昔神功皇  
后新羅国より御歸陣の時此地の三流の神幡を殘し  
置て異国を降伏し宝祚の永久を誓給ふ略此八流の  
神幡ハ筑紫胸形明神自織給へる所の幡あり故に宗  
像明神とも号し又織幡宗像明神とも号し又ハ宗像

八幡とも号す云説の有ハ其御幡ハ主々ハ宗像大  
神の御霊を託給へる傳の有けむく然云るある可  
し然れハ此織幡神社ハ本より宗像大神ハ坐を後世  
武内大臣を祀奉れり其傳の亡ありたるハ  
有ぬ可き文徳天皇実録ハ嘉祥三年七月丙子朔甲辰  
授筑前国織幡神從五位下三代実録ハ元慶元年十二  
月十五日辛巳授筑前国從五位下織幡神正五位下  
見元たり續風土記ハ織幡神社ハ鐘崎の民家を去る  
事良方五町許ハ在り此山九くして何方よ  
り向ひても皆面無し林木茂り因云右ハ云る宗像  
此山を小屋山云と書せり續風土記ハ  
七社の其第ハ右の織幡神社あり其第五許斐山神社

王丸村の上の山を許斐山云ふ山上ハ許斐権現の  
社有り九月十九日祭有り文徳天皇天安元年熊野権  
現を勧請すと宗像縁起ハ所見たり宗像大宮司有し  
時ハ此社ハ田島の神輿渡御有て祭儀有り此山上  
ハ人の不見池有り大岩ハて登る事あらず山の九分  
ハ在り田島社ハ神事有る時ハ今も許斐の社人  
鐘崎の社人来て神樂を勤む兩所共ハ古来宗像社の  
神樂の役人あり許斐ハ社人十人鐘崎ハ一人有  
り記せり熊野ハ出雲あるハ紀伊あるハ知るぬ  
ども何れハ一ても三女神の御祖ハ渡らせ給ハバ此

のハ神託ありの有て勸請せし由 王丸村ハ田島の邊津宮あり南方二里余あり在り予去二年宗像ハ詣たり時大島あり佐藤道一云る者予を送りて王丸村の社人中津文庭の家ハ到れるハ其時ハ然り由有る神ろハ心山着ず有しハ道を急ぎて得詣りしハ心残りあり事其第六孔大寺ハ同書ハ池田村ハ屬せりありけれ 北 宗像山の此ハ続けり高山あり山の八分上ハ孔大寺権現の神社有り池田村あり十町許有り是和州吉野の藏王権現一神あり云ふ其鎮座の初知れず山頂ハ大穴有り故ハ孔大寺と号す云ふ 下 略ハ有り右の藏王云ハ祭神ハ彦名命ハ御在り坐り又大穴有り依て孔大寺云云と云る然る穴も有べきあれども

心行ぬ事あり大穴持命ハ彦名命を祀れるハ就て然る説も出来りるハ有む寺僧ハ然る跡無し説を云者あり其意を反して考ふ可し 万葉六ハ天平二年庚午冬十一月大作 坂上即女祭帥家上道超筑前国宗形郡名児山之時作歌一首大汝少彦名能神社者名著始鷄目名耳字名児山跡負而吾恋之十重之一重裳奈具佐末七国ハ詠るハ右ハ異ある所ハ有れども當郡ハ此ニ神の由有る證其第七福庭上ハ未考へず○神名式ハ筑前國御笠郡竈門神社 大神 八幡本記ハ祭神玉依姬命を祀る是あり此社の下ハ益影井とて清水涌出る岩穴有り東西四尺有余南北三尺ハ過たれ其水清浄ハ一増減無し衆人此水を以て顔を照しすハ老顔と云



も女壯の如し故に益影井々云々や是則神功皇后  
の産湯の用給ひし水とあむ此を以て左殿の神功皇  
后右殿の八幡大神を祀りて相殿とす云々此説の  
如くは其祭る所八幡三所にも異々ざる者あり又其  
益影井も宇佐男山等の石清水の同トけり何れも  
しても玉依姫命の三女神の御在し坐す事違ふ可  
くすあむ又此竈門山を宝満山と云も其玉依姫命の  
御名に因て作りし山名ありむし神社本記に宝満  
明神恐三女神也竈門山清水在降玉依姫鎮座也謂益  
影井之所見たり猶又竈門神社を槌玉依姫命の  
三女神の渡りせ給ふと云事を知

る則有り其ハ二十二社注式に箱崎宮を一應神二聖  
母三竈門と有る八幡本記に同宮神功皇后を中殿に  
祭り左に姫大神右に聖母の神功皇后を常々然申せる  
違へぬ也大統後紀に養和七年丙午朔丙寅授  
神の當りる者あり  
筑前国従五位下竈門神従五位上文徳天皇実録に嘉  
祥三年十月乙巳朔辛亥授筑前国竈門神従五位上  
有り然れども前後共不同ト位階 あり可き事有  
ましけり誤あり三代実録に貞観元年正月廿七日  
甲申奉授筑前神正五位下竈門神従四位下と有るを合  
せて曉る可し中右記に嘉祥元年十一月筑前国竈門  
神正一位と見え百練抄亦此不同ト 因ふ事あり  
由無き事あり

△三毛郡 従五位下  
鳥神  
△三毛郡 高良  
五命 神社  
有る此即三安神  
て渡りて給ひ由筑  
前國福成神社  
記を得し傳十八  
百少委く明し  
奉り如く其本社  
本國神名帳  
三瀨郡 正六位上  
垂媛命と有る此  
大神の其始水  
沼御在し坐し  
舊地より謂も猶  
同

此も竈門山あり西南の背振山と云有り土人云背  
振山の神功皇后三韓御征伐の時陣を張給ひし御跡  
有る山巔の平地有る此所海上より遙く見渡さる  
所あり山半の辨財天社有り云る此も宗像神  
の御在し ○筑後国市の式社所見さる此も彼国の  
坐あり  
神名帳正六位上宗像神宗形若草神宗形御井天社  
と此云社何郡ある知難し御井郡従五位上宗形金  
己呂神宗形神三瀨郡従五位下宗像神山門郡正六位  
上宗形本神上妻郡正六位上宗形神と所見たれど  
も今此を知べしす此第三一書の三女神の御事を  
此筑紫君祭神是也と見えたる和名枚郡各の三瀨  
美無 有り又三瀨郷も有る其三瀨郡あり御紀  
萬

所見たる所ハ有べき此を宗像本社之事と為る  
今水沼と云地ハ弓頸神社と云有る者あり可  
馬頭神社と出たる社あり此社地元水沼あり時  
ハ一の島あり有る云り若く馬頭ハ女斎ありハ  
其命と申す大社有る ○豊前国宇佐郡比賣神社名神謂  
ゆる八幡三所の姫大神ハ御在し坐て第三一書ハ即  
以日神所生三女神者 使降居干葦原中国之  
宇佐島其と有る是あり此も宗像大神ハ御在し坐せ  
ハ此ハ註し奉りむる為るハ惣て八幡宮の御事ハ一  
群ハ束ぬて註さむあむ宣し可きと思成りて皆  
傳十八卷ハ仕ぬつ像但此ハ八幡宮と云ずして其宗  
像大神を祀奉る御社を後ハ某ハ

幡宮マ云々限りの奉り又豊前国企救郡小速鞠神社  
申す御在し坐す社傳ハ本殿三女神左彦火出見尊  
右尊不合尊豊玉命豊玉姬命を祀奉る云々神  
考詳節ハ彦火出見尊也云々傳聞の説ハ能  
也正さざる者ハ所見たり猶此御社の御事委しくハ  
傳十百長門国住吉荒魂神社の事ハ因有て已ハ註  
せり此社傳ハ安政元年八月十四日予長門国赤間關  
奉り其社人ハ就て親○神名式ハ肥前国松浦郡田島  
坐神社大社説ハ宗像同体云々云り筑前国宗像  
神社三座の中ハ邊郡宮ハも田島村ハ御在し坐て

十五年九月十六日  
授肥前国從  
四位上田島神正四  
位下同

肥前国号松浦  
神社

田島社ハ申奉りハ此神社を宗像同体ハ申す事甚  
其謂有り云べし神階の御事ハ三代實錄ハ清和天  
皇貞觀元年正月廿七日甲申奉授肥前国從五位下田  
島神從四位下同二年二月八日己丑進肥前国從四位  
下田島神階加從四位上同十八年六月八日癸丑授肥  
前国從四位上田島神正四位上ハ所見たり諸社一覽  
ハ上松浦下松浦共ハ鏡宮ハ稱す田島神社ハ上松浦  
云云云々云り鏡宮ハ肥前国記ハ昔氣長足姫尊  
我助福乃用御鏡安置此所其鏡化而為石而在山故各  
曰鏡宮也見えたるが如し然るハ分年代記ハ松浦  
社者鏡宮也仲哀天皇弟稚武王也又清和天皇実  
有りとも其謂れ甚詳さざる事あり

○日本書紀傳十五

○四百三十三

録小貞觀十三年四月三日己卯授肥前国正六位上宗  
形天神從五位下同十五年九月十六日戊寅授肥前国  
從五位下宗形神從五位上之所見なり此社松浦郡  
田平村惣社宗形明神是なり之云り



右安政三丙辰年十月六日始十二月廿九日終為中間依  
莊內酒肆之事公私念忙彼此繁雜而不能力也予也關係  
其事者應于門人之請也臨私欲而不敢怠也神明幽察為  
云



